
一匹狼 ~番外編~

原木野徹也

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

一匹狼（番外編）

【Zコード】

Z0405E

【作者名】

原木野徹也

【あらすじ】

生まれた時からいつも一匹の狼。群れなんて、大嫌いだよ。前作、「一匹狼」の番外編というか、スピノオフというか……。一応リボーンのFFになりますが、名前は一切出てきません。先に「一匹狼」のほうをお読みください。

むかしむかしあるところに、一匹の狼がいました。

その狼はいつもたつた一匹で歩き、一匹でモノを狩り、一匹でそれを食べ、やつぱりたつ一匹で眠っていました。

だけれど、そのことを『哀しい』と思つたことはありません。

もつと、ずっと前から、狼はひとりぼっちだつたからです。

自分でモノを狩れるようになつたころには、すでに母親も父親もいませんでした。

どこかではぐれたのか、自分を捨てて行つたのか、それとも死んでしまつたのか、狼は知りません。

それくらい前から狼はずつと一匹で生きてきたのです。

一匹でいることが当たり前で、それ以外のことなんて知りません。

それなのに、どうして『哀しい』なんて思えるでしょう。

それに、狼は強かつたのです。

たつた一匹でも生きていけるほど、人間達に捕まることがないほど、狼は強かつたのです。

そんな意味のない感情、邪魔になるだけの想いは、狼には必要な

いのです。

それでも時々、身体のどこかにぽつかりと穴があいたような、冷たい風が吹き抜けるような、そう感じることがありました。

森の中で、山の中で、ほかの狼を見かけたときです。

沢山の狼が、沢山の親子が、たくさんの兄弟たちが群れでいて、見ているだけでとても暖かでした。

『自分もあの中に紛れ込めたら……』

最初のことは、そう想つこともありました。

でも、狼はそんなことをしませんでした。

狼は、知っていたからです。

誰かに教わったわけではないけれど、ずっと昔から、生まれた時から知っていたこと。

狼は、ほかの土地なねばづから来た、自分たちと違う狼は群れの中に受け入れないです。

同じ種族ではあるけれど、決して仲間ではない。

それが自分たち狼。

分かつてゐる、分かつてゐる。それが決まり。

自分はひとりだ。ひとりでいるしかない。だつて、仲間などいないのだから。

近づいたところで威嚇され、吼えられ、追い出される。

無意味なことは、する必要などないのです。

どうせ、いつまでたつても狼は一匹でいるしかないのですから。

だから、狼は群れませんでした。

狼は群れることができませんでした。

狼は群れが嫌いになりました。

狼はいつも一匹でした。

群れなんて自分には必要ない。

自分は強いんだ。

他狼たにんの力を借りずとも生きていける。

実際に、今までそうやって生きてきた。

そう、自分は群れないからこそ、これだけ強いんだ。

だから、群れてるやつらは弱い。

弱い奴らに興味はない。

弱い奴らはすぐ消えていく。

弱いやつをかばい、また弱い奴が消えていく。

少しでもその現象を抑えるため、またたくさんの群れを作る。

だから、弱い奴らは決まって群れているんだ。

自分だけは群れない。

だつて、群れるのは嫌いだ。

群れてるやつらなんて大嫌いだ。

群れだらけのこんな世界、大嫌いだ。

だから、消してしまおう。

大嫌いな弱い群れなんて、強い自分の前に存在してはいけない。

だから、消そう。

すべての群れを、咬み殺してしまおう。

自分ならそれができる。

それだけの力を持つている。

それだけ、自分は強いんだ。

自分の前で群れることは許さない。

それからも、狼はずつと一匹ひとりでした。

狼は、沢山の狼の敵でした。

狼は、沢山の狼の脅威でした。

同じように沢山の狼は、狼の敵でした。

そして、同じように沢山の狼は、狼の脅威だったのでしょうか。

だからこそ沢山の狼を咬み殺し、自分の強さを確かめるよう、元々生きていたのです。

「だいじょ「ひ」ぶ」

いつか、誰かがそう言いました。

「だいじょ「ひ」ぶ。俺たちはいつもおれのことをめぐらす。追い出しありません」

どこの誰かが、狼に向かってそう言いました。

たしか、とても小さな草食動物。

周りに幾匹かの群れを連れて、恐れることなく狼に向かって言いました。

それは、確かに小さな草食動物でした。

見た目通りにとても弱くて、叩けばすぐにでも倒れてしまいそうなのに、急にとても強い狼になる、よく分からない奴。

「お前の力がいるんだ」

そう言つたのは、その草食動物の隣りに立つ、まだ小さな小さな狼です。

狼が強いと認める、たつたひとつの存在。

「今すぐじゃなくともいいんです。準備ができたときでも、ふと気が変わつたときでも、いつでも好きな時に入つてきてくれせー」

また、草食動物が言いました。

狼は草食動物から、ふいつと顔をそむけました。

群れは嫌いだ。

群れるなんてまつぴら御免だよ。

だけど……。

君を見ているのは、面白いかもしねない。

「……ふん」

それが、狼の答えでした。

その答えに草食動物は苦笑して、「やうやうか」と言いました。
ではまた、と別れのあいさつをし、去ってきました。

……君の傍にいるのも、悪くないかも知れない。

……君となら、一緒にいても大丈夫かも知れない。

だけど、今はその時じゃないよ。

草食動物と一緒にいるには、まだいろいろと準備がいるようですが。

それに、群れが嫌いなのは変わりません。

まだ、いろいろと、いろいろと、あるのです。

それに、どうやら草食動物は勘違いをしていました。

仲間に……、入りたいわけじゃ、ないんだけどね。

群れるのはやつぱり嫌いです。許せません。

でも、たまにはいいかな……、と思つよつになりました。

狼は今日も一匹です。

いつも通り、群れを見つけたら咬み殺します。

いつも群れてる弱い奴らは嫌いです。

でも、前のように自分の前からすべて消えてしまえばいい、とは思わなくなりました。

だって、そんなことになつてしまつたら、草食動物あぶのけに会ふなくなつてしまつます。

淋しがりやなくせに意地つ張りの狼は、今日もやつぱり一匹です。

(後書き)

雲雀さんの生い立ち妄想。

雲雀の親がどんな人か想像できなかつたので、「いなくていいんじやないの～」という感じで、こんな所に使つてしまつました。

執筆開始から三時間。

私史上最速で書きあげたので、誤字脱字は気にしないでください……！

……何が書きたかつたんでしょうね？（誤くな）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0405e/>

一匹狼～番外編～

2010年10月9日04時08分発行